

ホトトギス

昭和二十三年三月二十八日 瀬尾五竹出版 定価六二七号  
平成三年一月一日発行 第百十回巻第一号

# ホトトギス

一月号



## 俳句随想 〔三百四十三〕

汀子

前回は「心太」を例に、少なくとも季題ぐらいは『ホトトギス新歳時記』に準拠して正しく使おうと書いた。

今回は相変わらず質問の多いのは、動詞の連体形の問題と、音便の問題である。

連体形の問題については以前にも書いたことがあるが、今回は『ホトトギス新歳時記』第二版を例に挙げて述べよう。

- ① 荒海や 佐渡に 横たふ 天の川 芭蕉
- ② 山小舎に 泊つる 銀河を ふりかぶり 沖村典見
- ③ 西方の 浄土は 銀河落るところ 高濱虚子

文法の上からだけ言えば①と②は誤りであろう。芭蕉の句は「天の川」という体言を形容する連体形の「横たふる」としななければならず、典見の句は、「泊つる銀河」は意味的におかしいから、「銀河」の前で切れていると考えなければならぬ。とすれば終止形の「泊つ」にしななければならぬ。③の虚子の句は文法的には正しい。しかし①②は文法的に誤りだからといって俳句としての価値が無いのであろうか。

旬日記

汀子

平成二十二年一月四日 ロイヤル俳優

かた／＼と年始フアックス動き出す  
遠会 釈年 賀の 心通は せて  
上の 句につづく下の 句歌かるた  
富士へとる 旅路水仙郷 抜けて  
これからが主婦の 新年なりしこと

一月八日 工業倶楽部

帰る子に 二日の 鴨の 雑煮かな  
正月と 思ひ 稿 債抱 へぬし  
富士へとるより 初旅となり けり  
初旅でありて 仕事でありしこと  
一月九日 菅屋ホトトギス会

寒禽の 来てゐる 庭を 明け渡す

着流しの 似合ふ 春著 でありしこと

寒卵 一つ 落して 一人の 餉

一月十日 下萌句会

予定 書き入れ 余白 なき 初 暦  
初 富士を 俯瞰 着陸 態勢に  
冬 薔薇の 香に 包まれて めし 春り  
初 明り 街の 灯消えて ゆく 早さ

一月十二日 大阪倶楽部

寒 椿 咲 け ば 耐 ぶ る と い ふ 姿  
極 限 の 三 寒 に 処 す 旅 衣  
寒 灯 を 消 し 早 暁 の 旅 立 に  
六 甲 に 生 れ し 風 花 海 に 消 し  
寒 灯 の 点 る 家 路 に つ な が り し  
青 空 の い づ こ と も な く 風 花 に

一月十二日 綿業倶楽部

旅 先 に 送 る 春 著 と な り に け り  
一 泊 の 帰 路 に 凍 て め し 車 か な  
春 著 着 る つ も り の 準 備 だ け は し て  
一月十四日 清交社

新 年 の 挨拶 な れ ば 簡 単 に  
も う 一 度 揃 ふ 年 賀 と な り し こと  
初 旅 は 富 士 山 と 決 め ら れ し よ り  
春 著 着 る た め の 早 起 き な り し か な  
消 え さ う な 風 花 消 え ず 到 着 す  
乗 初 の 寒 さ お ろ し て 来 た る 風

一月十六日 偲ぶ会 ホテルマウント富士

寒 の 内 と て 万 全 の 旅 支 度  
富 士 雲 を 払 ふ 早 さ の 寒 日 和  
寒 晴 の 富 士 の 全 き 姿 今  
芽 吹 く 木 々 青 木 ケ 原 の 樹 海 と て

一月十七日 偲ぶ会 二日

人 悼 む 心 持 ち 寄 り 寒 の 富 士  
富 士 の 雪 赤 く 染 め ゆ く 朝 ぼ ら け  
こ の 寒 の 富 士 を 語 ら ぬ 人 居 ら ず  
隠 れ な き 富 士 に アル プ ス 寒 日 和

一月十八日 悼 湯川河南様

ま な 娘 よ り 看 取 ら れ て 春 隣  
風 花 の 舞 ふ 星 空 を 仰 ぎ け り  
風 花 の 一 片 頬 に 消 え に け り  
富 士 蔵 す 闇 風 花 の 舞 へ る 闇

一月十九日 有恒倶楽部

凍 蝶 や 旅 の 誘 ひ に 乗 る こと に  
ラ グ ビー の ぶ つ か つ て 又 ホ イ ッ ス ル

一月十九日 無名会

凍 つ る 夜 の 電 話 予 定 を く つ が へ す  
左 義 長 に 燃 す を 惜 み て ゐ る も の も  
燃 え 盛 る ど ん ど び ら ひ ら 飛 べ る も の  
凍 る 道 お ろ そ か な ら ず 運 転 す  
待 春 の 心 育 ち て ゆ く ば ち ぬ

凍 て て ゐ る 朝 の 間 暗 し 旅 立 ち ぬ  
は じ ま り し ど ん どの 火 勢 つ の り ゆ く  
一 月二十日 夏潮句会  
大 寒 と 思 へ ぬ 日 和 た ま は り し  
燠 赤 く 隠 す 焼 諸 知 つ て を り  
遅 れ 来 し 人 に 当 ら ぬ 焼 諸 も

一月二十三日 悼 辻口静夫様

富 士 隠 す 闇 風 花 と 星 空 と  
凍 蝶 の ほ と り に 日 差 届 か ざ り し  
マ ラ カ ニ ア ン 宮 殿 に 蝶 凍 て ざ り し  
た ま は り し 御 恩 謝 し つ つ 悴 み ぬ

一月二十八日 きんぎょ会

た ち ま ち に 空 一 枚 と な る 霰  
傘 に 音 立 て て 霰 で あ り し か な  
消 息 は 空 よ り の も の 夜 の 霰  
歌 留 多 と る 全 身 に 氣 を 漲 ら せ  
か る た に は 所 有 権 な し 飛 ば し け り

一月二十九日 時雨会

折 れ さ う に 落 ち さ う に 軒 水 柱 か な  
さ め て よ り 甘 さ 加 は る 福 沸  
水 音 の 消 え つ つ 作 り 滝 水 柱  
と び 込 ん で 来 し 旅 話 春 隣  
春 近 し 予 定 確 か め つ 加 へ  
寒 月 の 存 在 ビ ル の は ざ ま よ り

# 廣太郎句帳

廣太郎

平成二十二年一月五日「俳句研究」出句

あの角にバレンタインの日の予感  
クロツカス土を拒んでをりにけり  
畝といふアスパラガスの主張かな  
ビル風の角度チューリップの角度  
敷島の道メーデーの騒きかな

一月七日 蕉心会

目覚めとは七種粥の香るより  
冬帝の威に折れ曲る水尾の先  
冬帝を拒む高さに咲ける庭  
侘助に又思ひ出を繋ぐ句座

一月十一日 朝日カルチャー若草句会

鏡餅海老が躍つてをりにけり  
咲くものを従へ固き冬芽かな  
大空に諸手を挙げて冬木の芽  
鏡餅 大きく 未来 語る 子等  
名木の冬芽名もなき木の冬芽

一月十四日 土筆会

きらきらときらきらと若水の綺羅  
初鴉 孤 高飼 犬 孤 独 かな  
日溜りといふ早梅の褥かな

福寿草 これからといふ園の黙  
これからはもう笹子とは呼ばないで

一月十六日 高濱年尾を偲ぶ初句会

流れには冷たき音色ありにけり  
雪雲の隠し切れざる富嶽かな  
快晴の本栖湖雪の山中湖  
冷たさを放ちてベテルギウスかな

一月十七日 年寿会

雪富士と別れて一路南国へ  
冬滝や写真に何か写りさう  
片時雨どうせ僕雨男だもん  
風除の二重三重浜の黙  
冬風に出てふ冬暖かき目覚めかな  
日の出でふ冬暖かき目覚めかな

波の綺羅冬日育ててをりにけり

臘梅の香の滑り落つ斜面かな  
暖房が却つて邪魔になる熟寝  
待春の海外つ国へ開きし日  
初鏡 あなたの牙は映さざる

一月十九日 草木瓜会

今度こそあの人ゲット初鏡  
武蔵野の稜線模糊と春を待つ  
初旅や全き富士の出来上る  
寒椿裏庭といふ静けさに

一月二十日 登高会

人偲ぶてふ初旅の縁かな  
寒椿数を競うてをらざりし  
悴んで余生を語る齢かな

葉裏てふぬくみに隠れ寒椿  
一月二十日 若水会

虚子 没後五十一年手毬唄  
虚子館のベンチにぼつねんと手毬  
新しき句碑の伽とし青木の実  
お降にはんなり濡るる京言葉  
お降や地震十五年偲ぶかに

一月二十六日 カトリック新聞選者吟

香部屋に朝の日差や春隣  
一月二十七日 目黒学園句会  
初富士の稜線といふ潔さ  
目黒てふ恵方に向ふ山手線  
嫁が君此処で逢つたが百年目  
初電車阪神ファンを満載す

一月二十八日 百夜句会

室咲に佇つ恋多き女かな  
鳥総松挿して主の出で行けり  
青木の実はみ出してゐる旧家かな  
影が先づ降り風花となりゆけり

一月二十九日 「俳句」出句

虚子館に十周年の春来る  
主亡き犬小屋指呼に猫の恋  
芦屋川上流 獺の祭やも  
春灯の消え俳磚の庭暮るる

虚子といふバレンタインの日の彼氏  
紅梅の香を閉ぢ込めてゐるロビー  
記念樹の桂長閑な高さかな  
祝ぎといふ二月礼者の縁かな

# 雑詠

## 廣太郎 選

闇掬ひ闇を返して風の盆 多摩 松井秋尚  
 風の盆すうつと沈みすつと立つ 同  
 手から手へ闇をなぞりて風の盆 同  
 虚子偲びつつ新涼の小諸訪ふ 京都 安原 葉  
 客どつと下車せり避暑地軽井沢 同  
 浅間山けふは見せぬと威銃 同  
 水音の耳に乾ける秋暑かな 東京 大久保白村  
 秋高し小諸に探す昼の星 同  
 虚子のこと語りて尽きず与良の秋 同  
 海中の一篇の詩を鱧に釣る 福山 竹下陶子  
 蟻の道にも伝統のありにけり 同  
 流灯や人の一生美しく 同  
 老の歩に合はず若き歩墓参 龍ヶ崎 今橋眞理子  
 太陽の一日を終へて盆の月 同  
 走馬灯回り回りに更けてきし 同  
 大阪の秋天のまん中に城 奈良 古賀しづれ  
 一城の鯪泳ぎ鯛雲 同  
 天に雲地に石を組み城の秋 同

三伏に耐へては果報読み耽る たつの 浅井青陽子  
 坂がかかる家路でありし大雷雨 同  
 離れなる書庫案内の道をしへ 同  
 法師蟬鳴き止みたたくて鳴き変る 香川 湯川 雅  
 どちらからともなく離れ秋思の歩 同  
 結局は独りとなりぬ虫の宿 同  
 辻棲の合はぬ話や麦茶飲む 神戸 山田佳乃  
 漣に揺れて一人のボートかな 同  
 想ふことふととぎれけり桐一葉 同  
 花野忌の風に灯されゆきし色 渋川 木暮陶句郎  
 理科室の人体模型稲光 同  
 昏さは森の囁き水澄める 同  
 婚礼の折詰かこむ夜食かな 神戸 日下徳一  
 窯を守る父母の夜食は子が運ぶ 同  
 社会部の夜勤四五人夜食とる 同  
 海の日の海へ電車のまつしぐら 相模原 木村享史  
 虚子の言夏炬の灰に書きて示す 同  
 硯洗ふ父の形見はこれ一つ 同  
 鵜は水へ鵜舟は闇に潜りゆく 宝塚 水田むつみ  
 時に音たてて崩すも鵜松明 同  
 鵜川とはよべの絵巻を幻に 同  
 朝靄の晴れて避暑地の目覚めけり 神戸 涌羅由美  
 ボート乗り榛名の神の掌 同  
 青春の声上げモーターボートかな 同

雑詠句評（十二月号より）

雅  
・比奈夫・くに彦  
一 歩・しげ人・仁義  
佳 乃・暮潮・昭代  
純也・廣太郎

野に山に春一番が運ぶもの 横浜 小川みゆき

立春を過ぎて最初に吹く強い南風。フェーン現象もその一つと  
いうことである。雀すら乗りくれば速い。

ただ、この句は物質のみならず、精神的なものを表現している  
ようだ。

春一番の運んで来る物も色々あるが、そのなかでも、やっと春  
だと思っ心が、一番嬉しいのであって、体全体で受け止めて、解  
放感に浸る姿が伝わってくる。（雅）

昔ある女性アイドルグループがこの題名でヒット曲を歌ってい  
たのも原因かも知れないが、この「春一番」という言葉自体万民

の知るところとなっているだろう。この程第三版『ホトトギス歳  
時記』にも新季題として採用された。それに果敢に挑戦された作  
者である。春の到来を告げる明るい響きの伝わってくる季題であ  
るが、大自然を通して大きく捉えているところが流石だ。最後に  
「運ぶもの」と、物事を特定せずに叙したところが、より大きな  
景となつて伝わってくる。（廣太郎）

監視員 緊張 土用浪の浜 八尾 山下美典

土用浪は大きな台風が南方洋上にあるときに寄せてくる波のう  
ねりを言い、とりわけ夏の土用の頃によく見られる。この波のう  
ねりは海岸で泳ぐ人々にも、ボートやヨットで沖に出る人にも大  
変危険が伴うので、監視員の人たちは片時も目を放せない。私た  
ちも子供の頃はその頃の海水浴は厳しく止められていたのであつ  
た。（比奈夫）

プールでもそうだが、遊泳する場所には、最近必ず「監視員」  
が高い椅子に座つて泳いでいる人が溺れたりしないように見張つ  
ている。少し荒れぎみの「土用浪」を遊泳している人を監視する  
のは、結構気が張るだろう。楽しそうな遊泳客と、緊張した監視  
員との対比が面白く描かれている。（廣太郎）

（以下略）



# 天地有情

# 江戸選

大潟の果てなき露に濡れしこと  
朝かげや動きそめたる露雫  
星の空洗ひ上げたる大夕立  
夕菅の閉ぢて湖畔の動き初む  
身寄りなき墓とて参る僧一人  
拙僧のたしなみと言ふ汗手貫  
さつと雨過ぎて異国や初嵐  
朝顔や花屋は今朝も濡れてゐる  
笹に吊る恋の一句もあらまほし  
星合の夜のいきいきと筆硯  
穂やかに二百十日の茅渚の海  
模糊としてゐても夕月織きかな  
しんしんと人の世遠ざかる夜霧  
からまつ霧しづる音こころの音  
上京の子規忌もつとも任重く  
鶏頭に埋れし墓と尋ねゆく  
微不至せならぬ言葉と思へども  
地を走る蟻より梅雨の明けにけり

東京 河野美奇  
同 稲畑廣太郎  
同 京都 安原 葉  
同 東京 今井千鶴子  
同 神戸 後藤比奈夫  
同 榎原 稲岡 長  
同 神戸 長山あや  
同 三村純也  
同 岩岡中正  
同 熊本 岩岡中正

暁にはや露草の目ざめをり  
活けてこそこの露草の紫よ  
箱庭や人に暇な日忙しき日  
藍作り阿波に数軒藍茂る  
山河立上がりて梅雨の明けし空  
高僧と人は知らずよ汗手貫  
木天蓼の白翻し晴れる風  
今朝の白昨日の白や沙羅落花  
手庇に古町西日の路地中を  
朽ち果てし鮎狩舟の懐かしや  
行く雲も花野も風の姿なる  
表より裏より渡り島の秋  
ダイヤ婚妻の顔見る今朝の秋  
野分跡渋谷の街の落葉踏む  
鈴蘭の冷たき香り流す風  
鈴蘭の香を嗅ぎをるは旅人ぞ  
うろたへしごとく瓜提灯の消ゆ  
亡者にもをとこをんなのゐる踊

豊中 瀧 青佳  
同 司 徳島 上崎暮潮  
同 相模原 木村享史  
同 河内長野 吉年虹二  
同 浅井青陽子  
同 たつの 浅井青陽子  
同 奈良 古賀しぐれ  
同 東京 田村 元  
同 岩見沢 奥田智久  
同 神戸 後藤立夫  
同 同

# 天地有情句評

汀子

大潟の果てなき露に濡れしこと 東京 河野 美奇

秋田県の八郎潟の埋め立ての広さに佇む作者の感慨。

星の空洗ひ上げたる大夕立 東京 稲畑廣太郎

大夕立の去った星空の綺羅。

身寄りなき墓とて参る僧一人 京都 安原 葉

僧としての心。

朝顔や花屋は今朝も濡れてゐる 東京 今井千鶴子

花屋の朝。

星合の夜のいきいきと筆硯 神戸 後藤比奈夫

七夕の筆や硯を身边に。

模糊としてゐても夕月織きかな 榎原 稲岡 長

少し光を得た夕月の存在。

しんしんと人の世遠ざかる夜霧 神戸 長山あや

夜霧に包まれた孤独。

上京の子規忌もつとも任重く 神戸 三村純也

子規忌の句会と講演の会の演者。

(以下略)